

適切に、秩序正しく

コリント人への手紙第一 14章 33-40節

はじめに

私が月の第二週に説教をする時は、新約聖書からお話しています。そして少しずつ「コリント人への手紙第一」を学んでいます。「コリント人への手紙第一」の12-14章には、「御霊の賜物」について書かれています。

コリント教会では、賜物を巡って混乱が起きていたようです。ある人たちが賜物の中でも、「異言」の賜物は最高のものだと考えて、皆に異言を語ることを求めたり、礼拝の中で無秩序に異言で祈ったり、賛美したりしていたようです。

使徒パウロは12章で、「御霊の賜物」には様々な種類があって、異言はその中の一つに過ぎないので、皆が異言を語らなくてもよいと教えています。13章では、むしろ皆が求めるべき賜物は、異言ではなく「愛」であると教えています。そして14章では、異言と「預言」を比較して、異言よりも預言を求めるように教えています。

コリント教会のある人たちは、異言こそ最高の賜物だと考えていましたが、パウロは異言よりも、愛や預言を求めるようにと教えているのです。

では異言とは何でしょうか。異言は、誰にも理解できない言葉で、自分や神様に向かって語り、自分を成長させるものです。それに対して預言は、誰にでも理解できる言葉で、人に向かって人を育てる言葉や慰めや励ましを語り、教会を成長させるものです。預言は必ずしも未来のことを言い当てるものではなく、神様の言葉を預かるものです。神様の言葉を通して、人を育て、励まし、慰めを与えるものです。今で言えば、説教に当たると言えます。

異言は自分を成長させるもので、預言は教会を成長させるものです。コリント教会のある人たちは、自分の信仰の成長ばかりを求めて、他の人に対する愛や配慮に欠けていたのです。また自分の信仰の成長ばかりを求めていて、教会全体の成長を考えることに欠けていたのです。その結果、教会の礼拝も無秩序になり、混乱した状態となっていたのです。

そこでパウロは、礼拝において異言を語る場合は、皆で一斉に語るのではなく、2~3人が順番に語り、誰か一人が必ず解き明かすようにと、異言を語る場合の秩序を設けます。また預言をする場合も、一人が長く語るのではなく、2~3人で順番に語り、皆でその預言の内容を吟味するようにと、預言をする場合の秩序も設けます。

こうしてパウロは、無秩序に混乱したコリント教会の礼拝に秩序を設け、礼拝を整えようとしたのです。

1. 女の人は教会で黙っているべき？

今日の聖書箇所 33-36 節でパウロは、教会における女性のあり方について教えています。「**神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。聖徒たちのすべての教会で行なわれているように、女の人は教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言うように、従いなさい。もし何かを知りたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女の人にとって恥ずかしいことなのです。神のことは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。**」

パウロはここで、女性は、教会では語ることを許されていないので、黙っているべきだと言います。この部分だけ読むと、女性は教会で一言も話してはいけないのか、女性が教会で話をするのは罪なのか、と思うかもしれません。

しかし私たちはこの部分を、14 章全体の流れやコリント教会の状況、さらに当時の社会的状況を考えて理解しなければなりません。パウロ決して、女性は教会では一言も話してはいけないとか、女性が教会で話をするのは罪であると言っているわけではありません。

11:5 でパウロは、「**女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります**」と言っています。これは、女性は頭にかぶり物を着けていれば、教会で祈ることや預言することもできるということを意味しています。

ただコリント教会の女性たちの中には、当時の社会的常識や教会の慣習を無視して、極端な行動に出る女性たちがいたようです。当時の女性は、礼拝では頭にかぶり物を着けることが社会的常識であり、教会の慣習でした。しかしコリント教会のある女性たちは、それらを無視して、礼拝に参加していたのです。

今日の聖書箇所でもパウロは、女性は教会では黙っているべきだと言っていますが、当時の社会的状況は、現代とは違って男尊女卑の社会です。現代は、十分ではないにしても、女性の権利が認められつつある社会です。しかし当時は、女性が公の場で話することは常識を外れたことでした。女性は慎み深くあり、一言話すだけでも慎重であるべきだと言われていました。どうしても話すべき時には、夫に対して、また夫を通して話すべきだと言われていました。当時の教会は、そのような社会的状況の中にあっただけで、教会での女性のあり方もそのような社会的状況を色濃く受けていたのです。

しかしコリント教会の女性たちの中には、礼拝の中で自由に語り出す女性たちがいたのです。誰かが礼拝で預言をした場合、その内容を吟味するために、女性たちも自由に発言して、礼拝が無秩序になり混乱した状態になっていたのです。

パウロは、ガラテヤ 3:28 で「**ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです**」と言っています。おそらくコリント教会のある女性たちは、イエス様を信じてクリスチャンになれば、男性も女性も関係ないのだから、礼拝でもかぶり物を着けなくてもいい、礼拝でも自由に発言してもいいと考えて、当時の社会的常識や教会の慣習を無視していたため、教会は混乱していたのです。

パウロは、なぜ教会で女性は黙っているべきなのか、その理由を三つの視点で語っています。一つは、社会的状況です。35 節でパウロは、「**教会で語ることは、女の人にとって恥ずか**

いいことなのです」と言っています。当時の社会的常識から見れば、女性が公の場で語ることは、恥ずかしいことだったのです。パウロは、当時の社会的常識を決して軽んじませんでした。なぜなら、教会があまりにも社会的常識から外れた行動をすれば、教会の外の人たちのつまずきとなると考えたからです。つまり教会が社会的常識を無視すれば、教会の伝道に支障が出ると考えたからです。

二つ目のパウロの視点は、他のすべての教会の慣習です。33-34 節でパウロは、「**聖徒たちのすべての教会で行なわれているように、女の人は教会では黙っていなさい**」と言っています。つまり当時のすべての教会では、女性が礼拝の中で自由に発言することはなかったのです。当時のすべての教会は、当時の社会的状況を色濃く受けていたからです。パウロは 36 節でも、「**神のことは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか**」と言っています。コリント教会は決して、すべての教会の中心ではなく、コリント教会だけが教会でもないのだから、他のすべての教会の慣習をよく見て、それに倣い、従うべきだとパウロは言っているのです。

三つ目のパウロの視点は、律法です。34-35 節でパウロは、「**律法も言っているように、従いなさい。もし何かを知りたければ、家で自分の夫に尋ねなさい**」と言っています。ここでの律法とは「旧約聖書」のことですが、創世記 2 章には、最初に男性であるアダムが造られ、その後女性であるエバが「ふさわしい助け手」として造られたと書かれています。その意味で、女性は男性に従うべき存在であるとパウロは言うのでしょ

う。このようにパウロは、三つの視点、つまり当時の社会的状況、当時のすべての教会の慣習、聖書の御言葉の三つの視点から、教会では女性は黙っているべきだと教えているのです。ですから当時の社会的状況や教会の慣習と現代は、大きく違っています。ですから、教会では女性は黙っているべきだという教えを、そのまま現代に当てはめることはできません。

しかし私たちは、パウロの三つの視点を現代の教会でも大切にしなければならないと思います。教会は、聖書の御言葉の視点を何よりも大切にしなければなりません。教会は、御言葉に基づいて教会形成をし、礼拝を整えなければなりません。

そして他の教会のあり方をよく見て、それに従っていかなければなりません。私たちの教会は、日本長老教会に属しているので、その憲法や信仰基準に従って教会形成をし、礼拝を整えていかなければなりません。決してそれらを無視するべきではありません。

さらに私たちは、現代の社会的常識も大切にしなければなりません。社会的常識から大きく外れて、教会の外の人たちのつまずきになること、伝道に支障が出るようなことは慎まなければなりません。

2. パウロが書くことは主の命令であることを認める

さて、37-40 節には、12-14 章に書かれていた「御霊の賜物」についてのまとめの言葉が書かれています。37-38 節でパウロはこう言っています。「**だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら、その人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認**

めなさい。それを無視する人がいるなら、その人は無視されます」。

パウロはここで、「本当の預言者、本当の御霊の人であるならば、私がこれまで語ってきたことをイエス様の命令であると認めて、受け入れるはずだ」と言うのです。イエス様は、使徒たちに権威を与えて、使徒たちを通して教会を形成されました。パウロもまた使徒のひとりでした。その意味でパウロの書いた手紙は、イエス様からの命令と言えます。そして、そのパウロや使徒たちの手紙は、「新約聖書」にまとめられました。その意味で、新約聖書は、イエス様の言葉であり、「神様の言葉」であると言えます。

教会においては、聖書の御言葉にこそ権威があります。当時の教会では、使徒たちの言葉に権威があったように、現代の教会では、聖書の御言葉にこそ権威があります。そして聖書の御言葉を無視する人がいるなら、その人は無視されるのです。一体誰に無視されるのかというと、それは神様にです。聖書の御言葉を無視する人は、神様に無視されることになるのです。私たちは、聖書の御言葉にこそ従い、聖書の御言葉に従って教会を形成し、礼拝を整えていかなければなりません。

おわりに

39-40 節でパウロはこう言います。「**ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません。ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい**」。

イエス様は、教会をキリストのからだとして建て上げるために、一人ひとりに違った賜物を与えてくださっています。教会は、一人ひとりが与えられた賜物を生かしていくことによって、キリストのからだとして建て上げられていきます。

しかし、賜物を生かす時に大切なことは、「すべてのことを適切に、秩序正しく」生かしていくということです。私たちは決して独りよがりにも賜物を用いていくのではなく、御言葉に従い、他の教会のあり方にも従い、社会の状況や常識に配慮しながら、賜物を用いていかなければなりません。

神様は、「混乱の神ではなく、平和の神」です。神様は、家庭と社会と教会に秩序を定めておられます。私たちは、神様が定めた秩序に従って、家庭生活を送り、社会生活を送り、教会生活を送ることが大切です。

家庭には、夫は妻を愛し、妻は夫に従う。子どもたちは両親を敬い、従う。そして父は、主の教育と訓戒によって育てるといふ秩序があります。

社会には、上に立つ権威に従い、上に立つ権威のために祈り、感謝をささげる、そして上に立つ権威は、皆に仕えるといふ秩序があります。

教会には、信徒たちから選ばれた長老と信徒たちから招聘された牧師たちによって、教会を治められ、信徒たちはその訓練に従い、賜物を用いて教会を建て上げるという秩序があります。

私たちは、御言葉に教えられている神様の秩序に従って、人生を建て上げていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは「混乱の神ではなく、平和の神」です。あなたは自然や社会、家庭や教会に秩序を定めておられます。その秩序に反する時に、私たちにあらゆる争いや苦しみ、悲しみがもたらされます。私たちの罪の性質は自己中心で、あなたの秩序よりも自分自身を大切にしようとしみます。

どうか私たちが、イエス様に贖われ神様との交わりを回復し、新しくされた者として、社会や家庭や教会の秩序を神様の御言葉に従って、回復していくことができますように。そして社会や家庭や教会に、混乱ではなく平和をもたらしていくことができますように。どうか私たちを用いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。